

児童における孤独感への対処

(中間報告)

筑波大学大学院 村上 達也

筑波大学大学院 西村 多久磨

Coping with loneliness in children

Institute of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba MURAKAMI, Tatsuya

Institute of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba NISHIMURA, Takuma

要 約

本研究の目的は、実際に孤独を感じたことのある子どもの割合を明らかにし、そのような子どもが孤独を感じた際に行う対処の実態を明らかにすることであった。小学4, 5, 6年生154名に対して、孤独を感じるかどうかと、孤独を感じた時にどのように対処しているかを尋ねた。その結果、孤独を感じたことがあると回答した児童は70.7%であった。また、孤独を経験したことのある児童から得られた孤独感への対処に関する記述をKJ法によって分類したところ、「趣味」、「社交」、「受容」、「隠蔽」、「攻撃」、「拮抗」、「その他」という7つのカテゴリが得られた。

【キー・ワード】 孤独感, 対処, 児童

Abstract

The purpose of this study was to reveal the portion of children who felt loneliness and to reveal the ways of coping with loneliness children actually used, by factual investigation. Participants were 154 fourth- to sixth-grade elementary school children. They responded to the question "How often had you felt lonely?" and answered the free-writing question "What do you do when you feel lonely?" Results revealed that 70.7% children had felt loneliness. The sentences, which were written by lonely children, that indicated coping with loneliness were classified into 7 categories-hobby, social contact, acceptance, concealment, aggression, opposition, and others-by the KJ method.

【Key words】 loneliness, coping, children

問題と目的

孤独感とは、“質”または“量”を問わず、何らかの社会的関係が欠如した際に生じる不快な経験であるとされる (Perlman & Peplau, 1981)。これまでの孤独感研究の多くは、青年や成人を対象にしたものであった。これは、児童は孤独感を体験しないものと考えられていたことに起因するが、海外では児童も青年や成人と同じように孤独感を体験していることが実証されて以降、児童を対象とした孤独感研究が増加している (Rothenberg, 1999)。しかし、本邦ではいまだ少ない状況にある。

孤独感の本邦の児童にとっても大きな問題であると考えられる。例えば、UNICEF (2007) が実施した子どもの well-being に関する国際比較調査において、日本は特に孤独を感じている子どもが多いことが指摘されている。この調査では 15 歳の子どものうち 29.8% が孤独を感じていることが明らかにされた。この割合は調査に参加した OECD 加盟国 25 国中、最も高く、さらに 2 番目に高かったアイスランドの 10.8% と比較すると問題の深刻さが伺えよう。

児童の孤独感仲間からの排除、いじめ被害、攻撃性、シャイネス、反抗的行動、不登校などの不適応変数と関連していることが明らかになっている (Asher, Hymel & Renshaw, 1984; Boivin, Hymel & Bukowski, 1995; Cassidy & Asher, 1992; 前田, 1998)。したがって、孤独感そのものも問題であるが、その後の適応を害するという点でも問題視されており、孤独感の低減に向けた介入研究が行われている (金山・後藤・佐藤, 2002)。

しかし、孤独感をただ低減させるだけでよいのであろうか。上述したように実際に孤独を感じている児童が多い中、孤独感という不快な感情を児童に体験させないという予防的なアプローチのみならず、孤独を感じた時に、どのように振舞えば不適応につながらないようにできるか、という孤独感への対処という観点からの研究も必要だと考えられる。

このような観点から、青年や成人における孤独感対処に関して、海外では Rokach & Brock (1998) などが、国内では諸井 (1989) などが研究を行っている。一方、Besevegis & Galanaki (2010) は、児童における孤独感対処の研究が長らく軽視されており、今後、児童の孤独感対処に関しての尺度を作成する必要があると指摘している。そこで本研究は、①今までに孤独を感じたことがある子どもの割合を明らかにし、問題の重要性を再確認すること、②尺度作成のための予備的な検討として、児童が孤独感を感じた時、孤独感を低減するためにどのように振舞うのかを明らかにすることの 2 点を目的とする。

方 法

調査協力者 関東圏に住む小学 4, 5, 6 年生 154 名であった。その内訳は小学 4 年生 51 名 (男子 23 名, 女子 28 名), 小学 5 年生 52 名 (男子 33 名, 女子 18 名, 不明 1 名), 小学 6 年生 51 名 (男子, 25 名, 女子 26 名) であった。

調査内容と手続き 質問紙では、まず孤独感を体験したことのある児童を抽出するために、「あなたはこれまでに、さみしさを感じたことがありますか」と尋ね、「1. なかった」、「2. 少しあった」、「3.

まあまああった」、「4. かなりあった」、「5. たくさんあった」の5件法で回答を求めた。次に、児童の孤独感への対処を把握するために、「あなたはさみしさを感じた時、どのようにまぎらわしたり、のりこえたりしますか。あなたがどのようにしているのかを教えてください」と教示し、自由記述法により回答を求めた。

結果と考察

まず、孤独感を経験したことのある児童を抽出するために、「あなたはこれまでに、さみしさを感じたことがありますか」という項目の度数を確認した(表1)。その結果、「1. なかった」と回答した児童以外の孤独感を感じたことのある児童は、109名(70.7%)であった。その内訳は4年生34名(男子17名、女子17名)、5年生42名(男子28名、女子14名)、6年生33名(男子17名、女子16名)であった。孤独感を経験したことのある児童から得られた孤独感への対処行動の自由記述の総数は243であり、1人あたり平均2.23件の記述が得られた。

表1 児童の孤独感経験頻度

label	count	%
たくさんあった	5	3.2
かなりあった	9	5.8
まあまああった	24	15.6
すこしあった	71	46.1
なかった	45	29.2
計	154	100.0

次に、心理学を専攻する大学院生2名によって、孤独感を経験したことのある児童から得られた孤独感への対処行動の記述をKJ法により分類した。その結果、「趣味」、「社交」、「受容」、「隠蔽」、「攻撃」、「拮抗」、「その他」という7つのカテゴリが得られた。結果の詳細は表2に示した。「趣味」カテゴリには、「好きなことをする」に代表される個人の好む様々な活動に関する記述が分類された。「社交」カテゴリには、「友達と遊ぶ／話す／相談する」、「家族と話す／相談する」に代表される誰かと関わることにに関する記述が分類された。「受容」カテゴリには、「寝る」、「泣く」、「なにもしない」に代表される孤独感に対して積極的な働きかけはせずに受け入れることにに関する記述が分類された。「隠蔽」カテゴリには、「わざと笑う」に代表される孤独感を感じていることを隠すことにに関する記述が分類された。「攻撃」カテゴリには、「ものにあたる／悪口を言う／暴力をふるう」に代表される攻撃を行うことにに関する記述が分類された。「拮抗」カテゴリには、「楽しいことを考える／する」に代表されるポジティブなことを考えて、孤独感に拮抗させることにに関する記述が分類された。上記6カテゴリに分類されない記述は「その他」カテゴリに分類された。

表 2 児童の孤独感対処の自由記述

カテゴリ	対処方略	count	カテゴリ	対処方略	count	
趣味	好きなことをする	5		友達と遊ぶ／話す／相談する	36	
	音楽を聴く	20		家族と話す／相談する	7	
	ゲーム	19		社交	ペットと遊ぶ	4
	読書	10		先生に相談する	3	
	TVを見る	6		メールをする	1	
	歌う	5		寝る	29	
	PCで遊ぶ	5	受容	泣く	6	
	散歩	5		何もしない	6	
	勉強	4		さみしさを忘れる	6	
	絵を描く	4		一人になる／一人で遊ぶ	5	
	食べる	3		我慢する	4	
	サッカー	3	隠蔽	わざと笑う	7	
	本や部屋の整理をする	2		そのことを考えない	7	
	体を動かす	1		気にしていないように振舞う	1	
	素振り	1		ものにあたる／悪口を言う／暴力をふるう	6	
	剣道	1	攻撃	大声で叫ぶ	3	
	ピアノ	1		髪の毛をかきむしる	1	
	ダンス	1	拮抗	楽しいことを考える／する	8	
	走る	1		面白いことを思い出す	3	
			紙に気持ちを書き出す	1		
		その他	次にどうしたらよいか考える	1		
			みんなについていけるようにする	1		
		計		243		

今後の研究

今回の研究によって、孤独感を感じたことのある児童の多さが明らかになった。また、児童が行っている孤独感への対処の内容が明らかにされた。今後は、本研究の結果から児童の孤独感への対処を測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性の検討を行う。また、児童の孤独感への対処行動を媒介とした孤独感と精神的健康の関連を検討し、どのような対処行動が児童の精神的健康に良い影響をもたらすのか検討する。

引用文献

- Asher, S. R., Hymel, S., & Renshaw, P. (1984). Loneliness in children, *Child Development*, **55**, 1456-1464.
- Besevegis, E., & Galanaki, E.P. (2010). Coping with loneliness in childhood. *European Journal of Developmental Psychology*, **7**, 653-673.

- Boivin, M., Hymel, S., & Bukowski, W. M. (1995). The role of social withdrawal, peer rejection, and victimization by peers in predicting loneliness and depressed mood in childhood. *Development and Psychopathology*, *7*, 765-785.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. (1992). Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, *63*, 350-365.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 (2002). 孤独感が高い児童に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, *9*, 1-10.
- 前田健一 (1998). 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック地位維持と地位変動群の比較— 教育心理学研究, *46*, 377-386.
- 諸井克英 (1989). 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, *29*, 141-151.
- Perlman, D., & Peplau, L.A. (1981). Toward a social psychology of loneliness. In R. Gilmour & S. Duck. (Eds.), *Personal relationships : 3. Personal relationships in disorder*. London : Academic Press.
- Rokach, A., & Brock, H. (1998). Coping with loneliness. *Journal of Psychology*, *132*, 107-128.
- Rotenberg, K. J. (1999). Childhood and adolescent loneliness: An introduction. In K. J. Rotenberg., & S. Hymel. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. Pp. 11-33.
- UNICEF (2007). An overview of child well-being in rich countries: A comprehensive assessment of the lives and well-being of children and adolescents in the economically advanced nations. *Innocenti Report Card 7, 2007*. UNICEF Innocenti Research Center.

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただきました児童の皆様、小学校の先生方に感謝いたします。また、本研究を進めるにあたり、筑波大学 櫻井茂男教授、濱口佳和教授に多くのご助言を頂きました。記して感謝申し上げます。

